十八史略

鶏口牛後　―現代語訳―

鶏口牛後

秦王は諸侯をおどして、領土を割譲することを要求した。（この頃）洛陽出身の人で蘇秦というものがいた。（初めは）秦の恵王のところに行って（自らの策を）説いたが採用されなかった。そこで（次に）燕の文侯のところに行って（自らの策を）説き（勧めて）、趙と南北に同盟を結ばせようとした。燕（の文侯）は（その意見に賛成して）蘇秦に（遊説の）資金を与えて、趙に行かせた。（蘇秦がその趙の）粛侯に説いて言った、「諸侯の兵士（の数）は、秦の十倍もおります。（諸侯が）力を合わせてもし西（の秦）に立ち向かったならば、秦はきっと破れるでしょう。大王様のために（策を）立ててみますと、六国が南北同盟を結んで、秦を（押し出して）のけ者にするのにまさるものはない（と思われます）。」と。粛侯はそこで蘇秦に（六国連盟を成立させるのに必要な）資金を与え、諸侯に同盟を結ばせた。蘇秦は（説得するときに）世間で言い習わされていることわざを引用して諸侯に説いて言った、「どちらかと言えば鶏のくちばしになっても、牛の尻になってはなりません。」と。こうして六国は南北に同盟し（秦に対抗することとなっ）た。